

世界の人のための JICA 基金活用事業
終了時活動報告書（2024 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	インドネシアの都市カンポンにおける魅力再発見と防災意識向上プロジェクト
(2) 実施団体名	SOWER
(3) 実施期間	2024年12月27日～2025年12月26日
(4) 実施国	インドネシア
(5) 活動地域	ジョグジャカルタ特別州のカンポン（集落）
(6) 活動概要	
①活動の背景： カンポンはインドネシア語でムラや集落という意味であり、ノスタルジックな下町を想起させる場所である。カンポンは行政の末端組織として町内会組織が機能しており、住民どうしのゴトンロヨン（相互扶助）が実践されている連帯の強いコミュニティである一方、多くは近代的な都市化の過程で郊外や農村部からの人口流入によって拡大したため、狭隘道路、耐火性能のない密集住宅群、洪水、地震といった災害に脆弱な環境を呈している。 防災に関していえば、国家防災庁 (BNPB) 等による非構造物対策（地方の防災局に対するリスクアセスメントやハザードマップ作成に関するトレーニングや促進プログラム）の他、地域レベルでも避難施設の利用や防災バッグの常備といった行動が浸透しているカンポンもあるが（現地 NGO へのヒアリング）、カンポンは地理的にも社会的にも多様なことから、住民の理解度や浸透度合いには差があると予想される。 そのような状況下において、住民が自発的にカンポンの改善に関わり、防災意識を高めていくためには、弊団体のような草の根の活動が担う役割も大きいと考え、活動を開始した。また、取り組みでは弊団体の活動拠点である熊本の熊本地震の経験や復興の過程を伝え、共有することもテーマのひとつとして設定した。	
②活動の目標： 本活動では、フィールドでのまちあるきやワークショップを通してカンポンの居住者が自らの居住地の魅力を再確認することでオーナーシップを高め、起こりうる災害に対する観察力や行動力を養う機会を提供することを目標とした。 また、本活動では、SOWER のメンバーが熊本地震の被災地である益城町等で実施したまちづくり勉強会や自主防災組織との協働プログラムの内容をもとに、インドネシアの対象カンポンにおいて次の	

3つの視点を提供する。

- 居住者が魅力を感じる場所の可視化（オーナーシップの醸成）
- 暮らしの中で自然環境の変化に気づく観察力を養う
- 発災時に注意すべき危険箇所や避難経路を把握する

2. 業務実施結果

（1）実施した内容

本事業では以下の取り組みを実施した。

① インドネシアのカンポンにおける一般的な防災の取り組みの調査（オンライン）

- 文献調査
- 現地 NGO へ対象カンポンの防災活動についての聞き取り

② 対象カンポンにおける事前調査（現地で実施）

- カンポンのインフラ整備状況についての確認
- 現地踏査

③ まちあるきとワークショップ実施（現地で実施）

- まちあるきと写真撮影
 - a. カンポンの魅力を感じる場所や風景
 - b. 発災時における危険箇所
- 参加者が撮影した写真の発表
- まとめ（SOWER によるまちづくりと防災の視点に基づいたフィードバック）
- 参加者事後アンケート配布、収集

④ 対象カンポンへのフォローアップ（動画送付）

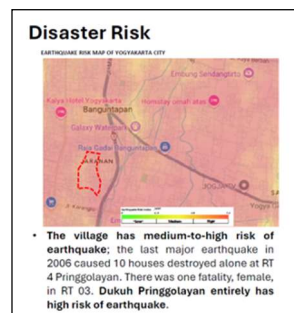
- 上記のワークショップの内容をマップデータとして格納したもの（Google Map）
- ワークショップキット（実践用教材）の制作
- Google Map とワークショップキットの使い方を説明する動画の制作・送付

（2）実施成果：

上記の内容をふまえ、現地で実施した主な成果は以下の通り。

① インドネシアのカンポンにおける一般的な防災の取り組みの調査

ジョグジャカルタの複数のカンポンを対象に、過去の災害と住民レベルで実施されている主な取り組みをカウンターパート（CARITRA）と確認し、対象カンポンの選定を行った。その結果、すでに現地カウンターパートと協働しており、2006 年のジョグジャカルタ地震以降、住民が自主的に防災活動を実施しているプリンゴラヤン村※を選定した。



図：対象エリアの災害リスク調査

※村とつくのは行政区の名称のため。当該村の居住形態はカンポンとほぼ同じである。

② 対象カンポンにおける事前調査（現地で実施）

弊団体が2025年4月にインドネシアへ渡航し、まちあるき前日にプリンゴラヤン村を訪れ、村長、CARITRAと共に現地踏査をした。村では地震以外にも突風による倒木被害が頻発していること、家屋が密集したエリアの存在、緊急時の避難場所になるオープンスペースが数多く点在することを確認することができた。

③ まちあるきとワークショップ実施（現地で実施）

当日は隣組長、自主防災組織、婦人会等で活動する27名が参加された。主な活動内容は以下の通り。

【弊団体からのプレゼンテーション】

弊団体が活動拠点としている熊本県で起きた熊本地震の事例を取り上げ、災害復興のなかでコミュニティが果たす役割や、復興まちづくりセンターの運営業務を通して弊団体メンバーがどのように地域と関わっているかについて紹介した。

また、プリンゴラヤン村でまちあるきとワークショップを行うにあたって、参加者にカンポンの魅力と危険個所を把握するため、次の内容について説明をした。

- **魅力の考え方**：神奈川県真鶴町「美の条例」の事例から、将来にわたって残していくべき景観は日常の暮らしの中にあることを紹介。参加者へ、コミュニティ活動の中心となる場所や愛着のある場所の写真を撮影するよう依頼した。
- **危険個所の考え方**：地震やその他の発災時に危険な場所を見つけることを伝えた。（例、避難時に危険な場所、倒木の可能性がある樹木等）

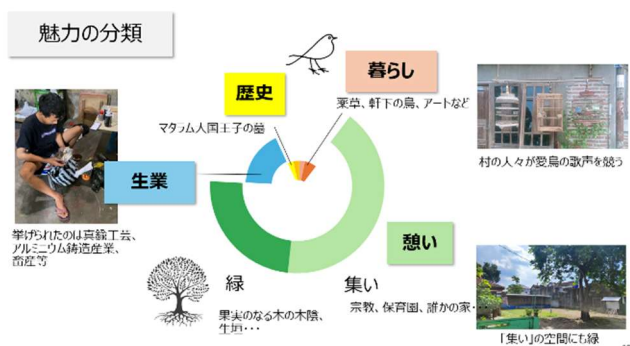
【まちあるき】

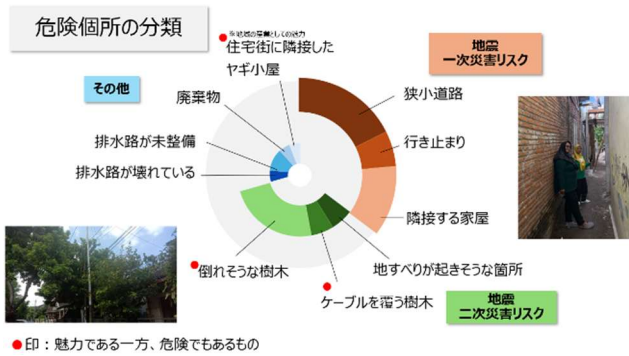
参加者はグループに分かれ、まちあるきをしながら魅力と危険個所を写真に収め、マップへ記録した。

【ワークショップ・発表】

まちあるきで発見したことを大判のマップに書き込み、グループごとに発表がなされた。

所感としては、参加者の方々の理解度と意欲が高く、的確に情報が収集された。後日、弊団体が結果を取りまとめ、魅力と危険個所は類似するグループごとに分類をした。内容は図の通り。特に、魅力と危険の両方を有する場所（危険個所の分類に赤丸で示されたもの）は、住民による適切な管理が必要と考えられる。





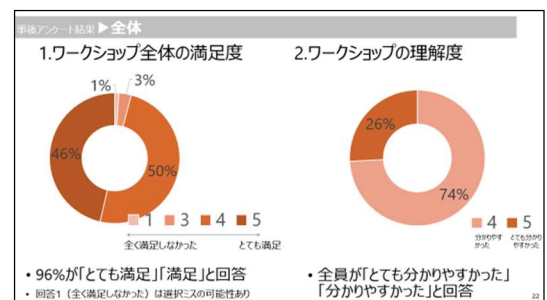
図：まちあるきで特定された魅力と危険個所の分類

出典：一般社団法人 SOWER

【その他-参加者アンケート】

参加者アンケートを配布・集計したところ、参加者の理解度、満足度共に高かった（右図を参照）。

自由記述では「この活動を頻繁に実施してほしい」「よりよく生きるために、また災害時に警戒するために、生活環境に注意を払うことが必要である」、「（まちあるきをきっかけに）排水路の破損が発見された」というコメントもあった。



図：参加者アンケート結果（抜粋）

【その他-Youtube 動画】

まちあるきとワークショップの様子は、CARITRA が動画を制作し、Youtube にアップロードされた。（https://youtu.be/Z_64tT1S0AQ?si=6c96B0mJpxk7vfZE）

④ 対象カンポンへのフォローアップ（動画送付）

取りまとめとして、弊団体は以下を制作した。

- 上記のワークショップの内容をマップデータとして格納したもの（Google Map）
- ワークショップキット（実践用教材）の制作
カンポンの住民が自らまちあるきとワークショップを企画、実施できるよう、実践用教材を制作した。本資料は CARITRA のウェブサイト（<https://www.caritra.org/publikasi/>）に掲載、一般公開された。



図：ワークショップキット表紙

- Google Map とワークショップキットの使い方を説明する動画の制作・送付
弊団体が制作し、CARITRA よりプリンゴラヤン村の参加者に届けられる予定（2025 年 11 月現在）。

（3）得られた教訓など：

まちあるきとワークショップのアレンジにあたって、インドネシアの慣習に倣うことが参加者側より求められた。例えば、参加者の交通費の支給、軽食の手配、会場内における村長等の役職者の座席配置等が挙げられる。

これらの要望については、CARITRA が率先して調整をしてくれたため弊団体は混乱せずにすんだが、円滑に行うためにはカウンターパートとの信頼関係構築と連携、あらかじめ予算の把握等をしておく

必要があるとわかった。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

まず、本活動を取りまとめた動画の送付にあたり、プリンゴラヤン村の参加者から CARITRA を経由して、もしくは弊団体の SNS を通してコンタクトが可能な状態としている。例えばワークショップキットの使い方など、技術的な疑問等が生じた場合には、弊団体がフォローアップを行う。

次に、弊団体は翌年度の JICA 基金を活用し、ジョグジャカルタ特別州内の異なるカンポンで同じ目的のまちあるきとワークショップを実施する予定である。プリンゴラヤン村と近いエリアでの活動となるため、代表者を招待するなど、住民どうしの緩やかな横のつながりをつくるきっかけを提供したいと考えている。

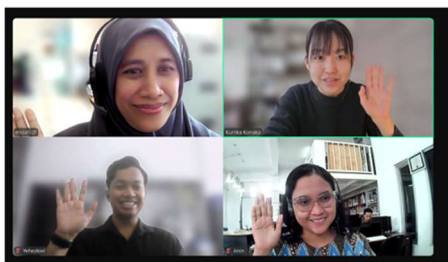
３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

プリンゴラヤン村でのまちあるきとワークショップを実施した際、災害リスク軽減フォーラム (FPRB、日本の自主防災組織に類する組織) の活動メンバーである T 氏が参加された。彼はジョグジャカルタ特別州のメラピ山の噴火時の緊急援助にも駆けつけるなど、日頃より精力的に活動しており、その知識や経験を活かしてワークショップでは詳細な分析をされていた。T 氏の活躍は他の参加者にとっても刺激になったと思われる。

翌年度以降の活動では、地域の重要な人材が積極的に参画できるような工夫をすることで、他の参加者も「日本側の支援を受ける」という受け身の姿勢から一歩進み、主体性を持って活動できるのではないかと考える。

（２）活動の写真



カウンターパートの NGO (CARITRA) との
オンライン打合せ



プリンゴラヤン村での現地踏査



プリンゴラヤン村でのまちあるきとワークショップ（熊本地震の経験を伝える）



プリンゴラヤン村でのまちあるきとワークショップ（まちあるき、魅力と危険個所の特定）



プリンゴラヤン村でのまちあるきとワークショップ（マップへの記録）



プリンゴラヤン村でのまちあるきとワークショップ（プレゼンテーション）



参加者の集合写真

出典：すべて一般社団法人SOWER

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

本プロジェクトは、設立間もない弊団体のメンバーと現地カウンターパートが１つのチームとして活動するはじめての機会であった。これまで個人の経験や知識に依存していたものを、チームとして発揮できた点に最大の価値があったと感じる。翌年度は本プロジェクトの中長期的な目標も見据え、精力的に活動していきたい。